

令和元年度 達成状況 及び  
令和2年度 教育(年度)目標

東筑紫短期大学

# 目 次

建学の精神と教育理念		1	頁
美容ファッションビジネス学科	達成状況	2	頁
	教育目標	8	頁
保 育 学 科	達成状況	11	頁
	教育目標	14	頁
食 物 栄 養 学 科	達成状況	17	頁
	教育目標	20	頁
専 攻 科	達成状況	23	頁
	教育目標	26	頁
学 生 部	達成状況	28	頁
	年度目標	32	頁
教 務 部	達成状況	34	頁
	年度目標	36	頁
事 務 部	達成状況	37	頁
	年度目標	38	頁

## 建学の精神と教育理念

昭和 11 年筑紫洋裁女学院が設立され、その後、幼稚園、中学校、高等学校、東筑紫短期大学、九州栄養福祉大学そして同大学院、九州リハビリテーション大学校と本学園は総合学園化してきて今日に至っている。この 80 年間の道のりのなかで一貫してそれぞれの学校教育の精神的基盤になってきたのが「筑紫魂」という建学の精神である。現在は以下に記す「筑紫の心」となって簡略化されているが本学の教育理念の基盤として根底に流れているのである。創設者・宇城信五郎の起草したものである。

「教育とは心の畑を耕すことであります。ともすれば草を生い茂らせ狭隘にして痩せ細りがちな心の畑の草をむしり肥料をつちかい新生する芽を伸ばしていくところに教育の使命があります。

東筑紫学園の建学の精神は教職員学生生徒が心をひとつにして勇気、親和、愛、知性の四つの芽を心の畑に種蒔き育てていくことにあります。

筑紫の心は国を愛し労働をいとわず親や祖先をあがめ己れをむなしくして社会に奉仕する人間像を理想にしています。」

そもそも建学の精神とは、主に私立大学（学校）などが創設されるときに、その大学の創設者がかけがえのない独自の性をもった理想的な教育思想・理念のことで建学の思想ともよばれる。主として、その大学の設置理念、教育内容の特徴、養成する人材の必要性、重要性及びその大学の社会に対する貢献内容などが表現されている。

本短期大学は被服科の短大から始まった。社会に役立つ実学としての和裁・洋裁とそれを根っこで支えるこの「筑紫の心」が不可分一体を目指して本学の教育がなされてきたのである。本学の生活実学教育課程はそういう意味で二つの構造的性格を持っている。つまり衣、食、住、子育て、介護という各学科の専門の知識、技術を修得探求させるということと、筑紫の心にある四つの徳目を育てながらやがてそれらを調和させ己をむなしくして社会に奉仕できる人間に成長させるという二つの教育的要請である。ここに本学の「生活者実学」の特徴がある。換言するなら現実社会で役に立つ専門的力とどんな困難な状況にぶつかっても生き抜いてゆく「<sup>まった</sup>全き生命力」を養成するということである。

特にその生命力の養成における基本は、勇気・親和・愛・知性を力強く成長させ一つの人格の中で調和統一し真澄（ますみ）の天空のような心を創りあげることである。そのなにもものにも汚されない泰然自若の真澄の心が実存する時はじめて筑紫魂が発動するのである。この場合の筑紫魂とは言うまでもなく筑紫という地名から発する宇宙魂を指しているのである。我々は己を空しくしてこの我々を創造して下された宇宙創造の根源的に触れ合うことによるのみ社会に奉仕できる最高レベルの生命力を発現できるのである。

このように生活実学教育理念を支えるものの根本として本学の建学の精神が存在している。

# 令和元年度 教育目標の達成状況

## — 美容ファッションビジネス学科 —

### 1. 学生支援

#### (1) 基礎学力向上のための学習支援体制 「初年次教育 キャリアアップ演習Ⅰ」

入学生に対し「初年次教育・キャリアアップ演習Ⅰ」で「基礎学力」を計るためのテストを、入学後すぐ(4/12)と、その3ヶ月後(7/12)に実施した。

学年の平均点は、国語 70.4→86.7、算数 73.8→78.5、英語 52.2→58.8 と上がっている。

初回テスト後の結果において、学力的にかなりの個人差が認められ、一括した指導は物理的に困難であると判断し、教科教育内、検定へ向けての特別講座、オフィスアワー等で分からないところを、基礎的なところから徹底的に個別指導を行った。

その結果、基礎学力の向上とあわせ、教科内容の理解力の向上や、検定合格へ結びついたと思われる。

#### (2) 教育内容の充実

- ① 日商PC検定や情報検定情報活用試験において、非常勤の先生と連携し、それぞれの担当教科内で分担し、検定試験内容の各分野につながるような履修内容とした。

IT・ネットワーク・モラルや法令等の基本的・実践的な知識分野の関連教科として「情報リテラシー(1年前期)」、「情報科学Ⅰ(1年前期)・Ⅱ(1年後期)」、文書作成分野及び実技(Word操作)等の実技分野の関連教科として「情報処理演習Ⅰ(1年前期)・Ⅱ(1年後期)」、データ活用分野及び実技(Excel操作)等の実技分野の関連科目として「ビジネスコンピューティングⅠ(1年後期)・Ⅱ(2年前期)」があげられる。

さらに各検定前には、各教科で学んだことを総括する特別講座を実施している。

単独の教科のみで検定試験合格に必要な知識や操作スキルを身につけることは難しく、教科ごとに協力が必要である。教科間の横断的協力や検定対策特別講座の実施により、学生へ多方面からアプローチでき、学生のモチベーションもアップし、教科に取り組む姿勢の向上が見られ、検定の合格率・取得率ともあがっている。

ただし、検定取得ももちろん大きな目的ではあるが、各種資格検定の受験と成功体験を通じて、学生の自己肯定感(自分には価値があるという感覚)や自己効力感(できるという感覚)を高め、知識や技能の修得のみならず、思考力や判断力を鍛えることが目的であり、それが達成できたと考える。

同様に、教科横断的な視点で教科内容を考えることとして、デザイン教科間でも教科内容のリンクとコラボレーションをこれまで以上に実施し、それぞれの教科において、学生の課題への取り組み方・完成作品のクオリティが上がったと感じられる。

- ② 各演習では、毎回異なる課題を作成する中で、まず完成に至る道筋を説明したのち、教示した内容に沿って、学生一人ひとりに考えさせ、課題完成へ方向づける。

そのプロセスの中で、疑問点や「できない」「わからない」箇所が「わかる」ように学生一人ひとりに個別に対応した。

また、教員：学生だけではなく、各演習の中で、グループワークの一環として、学生：学生

という、内容の理解や課題制作に向けた展開を試みた。

内容を理解し課題作成を終えた学生が、グループ内の「できていない」「わからない」学生に対して共に考え、グループの到達目標として課題制作にあたった。

「わかる」学生は他者に説明するという行動によってさらに理解が深まり、「わからない(考える・探求することが得意でない)」学生も、課題へ取り組むモチベーションの持続と、課題完成による達成感成果がみられた。

- ③ 実習・演習系(特に美容師コース 国試対象実技科目)の授業では、習得した技術や知識の理解度を、学生に発信してもらうように実習の「記録表」を作成し、教員と学生で確認しながらレベルアップ出来るよう、苦手部分の復習に細部まで取り組んでいった。

このことにより、学生個々において各回ごとの「理解・達成度の自己確認、課題の抽出や到達目標」などが明確化され、学習意欲の向上につながったと考える。

- ④ 講義に関しては、パワーポイントを活用しながら、ペアまたはグループで発言する機会を作り、受講学生全員がどのタイミングでも必ず授業に参加できるような展開を試みた。

講義という形式上、ともすれば教員からの一方的な授業になりがちであるが、この試みにより、受講学生が常に内容を受け止め、考え、更に発信するということで理解力が深まったと感じられる。

- ⑤ 単一的な(受講する学生にとって魅力のない=学習意欲が高められない)教科内容にならないよう、常にアンテナをはり巡らせ、教科内容の充実へ向け取り組んだ。

その一方法として、地域社会含め、外部の人的・物的資源を活用することに着眼した。

本学科の特色ある教科教育内容の充実と、学生の学習ニーズに応えるため、学科教員はもちろん自己研鑽に努力し、更に各分野のスペシャリストを非常勤講師としてラインナップした。

非常勤講師以外でも、各分野の専門的な知識や技術をもつ外部講師を(スポット的に)お願いし、特殊な設備や機材の紹介・使用や、教材のレベルアップなど、多方面で有意義な教科内容になったのではないかと考える。

### (3) 社会人になるための能力の養成

「キャリアアップ演習」の時間を活用し、社会人として必要な基礎的知識や、生活人として不可欠な要素を身に付けさせることを目的とし、今年度も特別講義の形式で多数の外部講師を招聘した。

- ・「スマホによるコミュニケーションツールの理解と危険性」

情報管理センター長 赤松 貴文 先生

- ・「救命処置の流れ～心肺蘇生と AED の使用」

小倉北消防署 井堀分署

- ・「ファッションイベントで地域活性化へ」

東京ガールズコレクション実行委員会 上席執行役員

(株) W TOKYO ソリューション事業局 局長 辻本 優一 氏

- ・「グローバルな視点・視野～北九州市から世界へ」

We Love 小倉協議会会長 (株) 辻利茶舗 取締役会長 辻 利之 氏

- ・「印象アップの話し方」

MC/研修トレーナー 尾座本 郁子 氏

- ・「パフォーマンス アート」

保育学科 木原 寛子 先生

- ・「知っておきたい年金のはなし」

日本年金機構小倉北年金事務所 国民年金課

- ・「地域産業の継承・グローバルな展開『小倉織』」

(株) 小倉縞縞 代表取締役社長 渡部 英子 氏

・「北九州発祥 生涯スポーツ サッセン」

生涯スポーツ 全日本サッセン協会 創設者 本村 隆昌 氏

#### (4) 行事教育

建学の精神「筑紫の心」に基づき、これまで通り「行事教育」にも重点を置き、人として生きていく力や、豊かな感性と教養を培い、卒業後は社会人として、美容・ファッション・ビジネスの専門分野で活躍できる人材の育成に努めた。

事前講義を必ず実施し、その意義や意味性も深く理解するよう指導を心掛けた。

このことにより、本学科学生の各行事への出席率は著しく高く、その意義や意味性も深く理解しているものと思われる。前出③の社会人になるための能力の養成と合わせ、豊かな感性と教養を培うという観点から、特別（学外）研修「テーブルマナー講座」、「小倉城再建 60 周年記念 平成中村座小倉城公演」観劇を実施した。特に「平成中村座公演」を経験できたことは、「後述：TGC 参加」と合わせ、地域社会の一員としての自覚と責任感、地元プライドを担う人材としての（細やかではあるが）意味性を持ったようである。

## 2. 就職活動支援教育の充実

### (1) 就職支援のための講座

今年度も、学科と就職指導課とが連携を取りながら就職講座を実施した。

本学科は2コース3フィールドに分かれているため、それぞれの専門に特化した講座や、「特別講義 印象アップの話し方」等、就職活動において不可欠な内容のものも多数実施した。

就職に関する情報の多様化や専門化に対応するため、講座のみにとどまらず、日常的に学科教員が学生一人ひとりに対応し、個々の就職活動の支援を行うことができた。

1年生は入学後すぐの5月に、就職ガイダンス内で「就職の手引き 2019 年版」を配布し、今後の就職活動に必要な「自覚」を促し、「本学での就職活動マニュアル」等を把握させた。

「2年生からのメッセージ」では、直近の先輩である（就職内定した）2年生が1年生へ向け、体験したばかりの就職活動の内容や、自分の気持ちの揺れ動き・意識の変化など、本当の意味での「生の声」を聞くことができ、就職活動に対する意識が高まったと思われる。

また、1・2年生に向け、社会人として現場で活躍している卒業生を講師として招聘し、「先輩からのメッセージ」を複数回実施した。2コース3フィールドそれぞれの専門職種に就く卒業生による講義内容は、学生と社会人の違いや、職業人としての責任感など、これからの就職活動をするうえで指針となる内容であったと考える。

美容師コースは、7月にリクルート、2月にセイファート(4月に就職フェア)より美容学生への就職レクチャーを開催した。関東や県外(自宅外)就職希望者もおおり、また国家試験受験もあるため、夏までの内定を考え早めの活動を心掛けさせた。

今回特例であったが、ビジネスフィールド1・2年合同による「企業実習(学外)」では、学外研修を中心に企業見学を実施した。

これまで漠然としていた、社会で働くことのイメージが、研修後の学生のレポート(報告書)では、企業理念の大切さや、給与(社会に対して奉仕=結果としての利益であること)の理解が深まったと記述があった。見学をした企業に就職したいという希望を抱いた学生もおおり、これからの就職活動について就職指導課と学科がさらに連携をとり、支援体制を整えたいと考える。

### (2) インターンシップの導入

インターンシップ制は、参加する学生にとって大変有意義なプログラムであるとする。

これまでも機会をとらえ、学生のインターンシップ参加に取り組んできており、その成果は（前年度の教育目標の検証で述べさせていただいたように）上がっている。

今年度も年度末の1年生へ向け、就職指導課を通じ（特にアパレル関係の）幾つかの企業からその機会をいただいた。

学科も学生も前向きに計画し、実施に向け準備段階に入っていたが、年明けから2月中旬以降の社会情勢（COVID-19 コロナウイルスの感染拡大防止）を踏まえ検討した結果、今回のインターンシップは残念ながら見送ることになった。

インターンシップに限らず、学生のこれからの就職（支援）活動へ向けて、次年度もこれまで同様、あらゆる可能性を考えていきたいと思う。

### 3. 地域社会への貢献活動

#### (1) ショーを中心とした地域貢献活動

今年度も、地域社会や団体の要請を受け、地域活性化等の目的に向け、積極的に地域貢献活動を実施した。

令和元年度 美容ファッションビジネス学科 社会貢献活動報告

##### ① TGC KITAKYUSHU 5th Anniversary COLLECTION

日程：令和元年8月31日（土） JR小倉駅JAM広場（改札前ステージ）

主催：北九州市都心集客推進委員会 他

TGC開催前から、街のにぎわいにつなげる「TGCキックオフイベント」を開催 産官学連携事業

##### ② 北Qクリエイション2019 反射するドレスのファッションショー

日程：令和元年9月7日（土） ゆうゆう壺番館（高齢者施設・マンション）

主催：KDA北九州総合デザイナー協会 共催：北九州市 他

「高齢社会、これからの生きるヒント」をテーマに掲げ、シンポジウム、プレゼンテーション、本学による「反射するドレスのファッションショー」で構成

##### ③ 反射材エキシビジョン2019 特別出品（展示）

日程：令和元年9月13日（金） 東京芸術センター21F 天空劇場

主催：一般社団法人日本反射材普及協会（後援：内閣府 警察庁）

反射材を使用した衣服の特別展示で7回目の参加 本学は協会特別会員 産官学連携事業

##### ④ TGC東京ガールズコレクション北九州

日程：令和元年10月5日（土） 西日本総合展示場 新館

主催：東京ガールズコレクション実行委員会

共催：北九州市 福岡県 北九州市都心集客推進委員会

地域社会に貢献のため、北九州市からの推薦により参加 産官学連携事業

・連続開催5周年のアニバーサリー「北九州ステージ」の作品5点が本学から選出され、5月末から約4ヶ月間かけて制作した作品を、モデルが着用しランウェイでパフォーマンス  
新聞掲載（密着取材含め）約10回

TV（ジップやめざましテレビ等全国ネット含め）約10回

##### ⑤ 市長表敬訪問 こくらハロウィン

日程：令和元年10月11日（金） 北九州市役所

実行委員会（本学も参画）の各大学、学生プロジェクトメンバーで市長への表敬訪問

⑥ 反射材フェア 2019

日程：令和元年 10 月 19 日（土）～20 日（日） 東京 池袋サンシャインシティ アルパ

主催：一般財団法人 全日本交通安全協会 反射材活用推進委員会 後援：警察庁

反射材の効果や交通安全の知識を、すべての年代が楽しみながら身に付けることを目的とする

反射材ファッションショー（本学はスチームパンクドレス出品）を開催 産官学連携事業

⑦ こくらハロウィン Fashion & Hair make Show

日程：令和元年 10 月 20 日（日） JR 小倉駅 J AM 広場（改札前ステージ）

主催：こくらハロウィン実行委員会（事務局：小倉北区役所）

地域活性化を目標に、市制 50 周年を記念して開催

本学は実行委員会メンバーとして続けて 7 回目の参加 産官学連携事業

⑧ 周望学舎シニアカレッジ Fashion & Hair make Show

日程：令和元 10 月 30 日（水） 東筑紫学園 講堂兼体育館

主催：北九州市立年長者大学校 周望学舎 他

元気にシニアライフを愉しむための提案として、本学共催で講演を開催 官学連携事業

⑨ 市長表敬訪問 TGC 東京ガールズコレクション北九州 報告会

日程：令和元年 11 月 19 日（火） 北九州市役所

TGC 北九州「北九州ステージ」報告会 市長への表敬訪問

⑩ TGC 北九州ステージ作品（本学制作）展示

日程：令和元年 11 月 19 日（火）～12 月 19 日（木） 北九州市役所 1F

TGC 北九州「北九州ステージ」作品 5 点

⑪ クリスマス デコレーション 展示

日程：令和元年 11 月 27 日（水）～12 月 25 日（水） 北九州モノレール 且過駅

地域貢献の一環として、街のにぎわいにつながるよう、制作したクリスマスリースを中心にクリスマスデコレーションを展示

⑫ TGC 北九州ステージ作品（本学制作）展示

日程：令和元年 12 月 19 日（木）～12 月 25 日（水） 北九州モノレール 且過駅

地域貢献の一環として、街のにぎわいにつながるよう、TGC 北九州「北九州ステージ」作品 5 点展示

⑬ Monorail Jack! Xmas Fashion Show

日程：令和元年 12 月 24 日（火） 北九州モノレール 小倉～企救丘 往復（車内）

主催：北九州高速鉄道株式会社 東筑紫短期大学 美容ファッションビジネス学科

地域活性化を目標に、イブの夕暮れ、クリスマス特別車両をジャックしてファッションショーを実施

(2) チャリティ募金

美容師コース学生による学内サロン「salon de CHIKUSHI」を、今年度も担当学生の保護者・家族・親族・友人等の皆様を対象とし、美容専門教科の特別実習としての位置づけで実施した。

学生においては、単に知識や技術の向上だけでなく、接客に携わる職種として不可欠なコミュニケーション能力や、職業人として何を求められているのかを察知する力や、チャリティ募金による社会貢献への展開など、人格教育の面からも、教科教育の枠を超えた大きな一歩となったようであ



る。

なお、チャリティ募金は2018年度（前期7,800円・後期6,000円）、2019年度（前期4,500円・後期6,600円）、2020年度（前期）の計5回分をまとめて、しかるべき団体へ募金する計画である。

### （3）学生ボランティア

本学科の特色を活かし、地域活性化に主眼を置いた貢献活動として、ボランティアで今年度も活動させていただいた。その中で特筆すべきものをあげさせていただく。

今年度、北九州市からの推薦・選出により美容ファッションビジネス学科 ファッションビジネスコース ファッションフィールドの学生がデザイン・制作した作品5点が、「TGC 東京ガールズコレクション in 北九州」のステージで、連続開催5周年というアニバーサリーイヤーの光栄なタイミングで、北九州の代表として、ステージを飾らせていただいた。

TGCへは、平成28年度からこれまで、バックステージのフィッターとして参加していたが、今年度はフィッターとそれ以外に、フィッターを総括する役割のブランドアシスタント、5thアニバーサリーエリアスタッフとして多数の学生がボランティアとして参加した。

これ以外にも様々なシーンで地域社会からお声掛けいただき、ボランティアとして参加した学生（希望者多数の為、学科内選抜）においては、その後の学習意欲や学生生活における意識の高さ、地域社会の一員としての自覚など見受けられ、非常に貴重な経験だったようである。

これからも、美ファビ学科の教科内容の特色を活かし、学生ボランティアとして機会をいただければ、ぜひ経験させたいと考える。

# 令和2年度 教育目標

## — 美容ファッションビジネス学科 —

### 1. 学生支援

今年度も、知識・技術の修得に加え思考力・判断力・表現力等の能力や、主体的に学習に取り組む態度の育成を目標とし、アクティブラーニングを積極的に取り入れた「学習支援」を、卒業後、社会生活する上での多岐にわたる「人間力」を培うことを主軸とし、学生への様々なアプローチを実施したい。

#### (1) 基礎学力向上のための学習支援体制

今年度も授業改善に向けた組織的取り組みの継続として、学生の「基礎学力の向上」に主眼を置いた学習支援体制をあげたい。

前年度実施して効果があった方法（基礎学力の向上とあわせ、教科内容の理解力の向上や、検定合格へ結びついたと思われる）を、教科教育内、検定へ向けての特別講座、オフィスアワー等、今年度も多方面からのアプローチにより、基礎的などころから徹底的に個別指導を実施したい。

#### (2) 教育内容の充実

授業内容の充実・学生の学習ニーズに応えるという両観点から、前年度実施して効果が認められた以下の方法を今年度も継続していきたい。

- ・社会の状況を幅広く取り入れ、学科・学生の到達目標を掲げる。
- ・自らの人生を切り拓いていくために求められる資質・能力を培う。
- ・教育を学内に閉じず、学外・地域等と連携する。

#### 「主体的・対話的で深い学び」の実現（アクティブラーニングの視点）

本学科の教科教育の特性として、実習や演習が大きな要素をしめており、アクティブラーニングの導入という点では、かなり以前から教員も学生も「意識せず」実施できていたように思う。

今年度もアクティブラーニング形式を積極的に導入し、講義科目も含め、一方的に受講するのではなく、学生が主体的に取り組める教科内容の展開に努めたい。

#### 「カリキュラムマネジメント」の再考

- ・教科横断的な視点で教科内容を考える。
- ・学生の資質や背景、現状をもとにPDCAサイクルを回す。
- ・地域社会含め、外部の人的・物的資源を活用する。

#### (3) 社会人になるための能力の養成

本学の特色ある実務教育の過程で身につく、挨拶・礼儀・言葉遣い・身だしなみなどのマナー教育を始めとし、コミュニケーション能力やプレゼンテーション能力、日々の生活と合わせ、生活者として必要な一般常識の体得、また社会人としての視点から必要なスキルやキャリアアップを目標に、特に人格教育、付加価値の高い人材育成という観点において、これまで同様、修得のための支援を主に「キャリアアップ演習」の時間を活用し実施したい。

方法の一つとして、社会人として必要な基礎的知識や、生活人として不可欠な要素を身に付けさせることを目的とし、今年度も専門分野のスペシャリストを特別講義の形式で招聘したい。

#### (4) 行事教育

建学の精神「筑紫の心」に基づき、これまで通り「行事教育」にも重点を置き、人として生きていく力や、卒業後は社会人として、美容・ファッション・ビジネスの専門分野で活躍できる人材の育成に努めたい。

また行事教育の一環として、その場を学内に限定せず、学外研修を取り入れ、豊かな感性と教養を培うための内容を展開したい。

これまで同様事前講義を必ず実施し、その意義や意味性も深く理解するよう指導していきたい。

## 2. 就職活動支援教育の充実

### (1) 就職支援のための講座

今年度も、就職支援において、学科（クラス担任やコースの専門教科担当者）と就職指導課とが密に連携を取りながら、学科教員で学生個々へ向け、昨年度より更に深い指導（個別相談対応を中心に）を実施したい。

就職に関する情報の多様化や専門化に対応できる能力育成の為、今年度も外部講師による特別講義や、社会人として現場で活躍している卒業生を身近な講師として招聘したい。

卒業後の就職における方向性の指針や確認、社会人としての知識や人格教育の時間を設けることにより、特色ある教科教育・実務教育の内容充実にも繋がると考える。

### (2) コース・教科等、専門性に沿った社会体験

インターンシップ制は、参加する学生にとって「働くとは何かを実感する、実際の職種・仕事内容を知る、仕事に対する適正を知る」ことができる、大変有意義なプログラムであると考えます。

これまで参加したすべての学生レポート（報告書）には、「将来の目標や課題を明確にすることができ、今後の生活に活かすように努力する」旨書かれていた。

学生にとって、実際の職場で体験・経験する機会を与えられたことにより、知識や技術だけでなく、人格形成の意味からも大きく成長できるのではないかと感じる。

卒業生（社会人として経験を積み、また職場内である程度のキャリアを積んだ、ポスト的に安定している）のネットワークを活用し、実学という（責任もって仕事に当たるといふ）点からかなりの効果を示す具体的な方法として、学業を主体とした専門分野に沿ったアルバイトも経験させていきたいと考える。

### (3) 地域社会への貢献活動

学科の特色ある教科内容を活用し、これまで多岐にわたり実施した地域貢献活動において、参加した学生は、教科教育だけでなく、人格教育においても大きく前進することができたように感じる。

今年度も、本学科の特色ある教育内容を活用し、学内・学外多方面からのご指導・ご支援・ご協力を仰ぎながら、学科最後の機会として、本学科だからこそ可能な貢献活動を積極的に展開したいと考える。

#### ① ショーを中心とした地域貢献活動

今年度も、地域社会や団体の要請を受け、地域活性化等の目標に向け、積極的に地域貢献活動に取り組みたい。（R2/3/23 現在、北九州市含めすでに3件の要請あり）

#### ② チャリティ募金

美容師コース学生による学内サロン「salon de CHIKUSHI」を、今年度（前期）もこれまで同様、美容専門教科の特別実習としての位置づけで展開を試みたいと考える。

学生において、単に知識や技術の向上だけでなく、接客に携わる職種として不可欠なコミュニケーション能力や、職業人として何を求められているのかを察知する力や、チャリティ募金による社会貢献への展開など、人格教育の面からも、教科教育の枠を超えた大きな一歩となるからである。

なお、チャリティ募金は2018年度（前期7,800円・後期6,000円）、2019年度（前期4,500円・後期6,600円）、2020年度（前期）の計5回分をまとめて、しかるべき団体へ募金する計画である。

### ③ 学生ボランティア

2016・17・18・19年度と続けて4回、北九州市から要請いただき、「TGC北九州 東京ガールズコレクション」へ学生ボランティアとして参加させていただいた。

これ以外にも様々なシーンで地域社会からお声掛けいただき、ボランティアとして参加することができた。

ボランティアとして参加した学生においては、その後の学習意欲の向上や、学生生活における意識の高さ、地域社会の一員としての責任感の芽生えなど、非常に貴重な経験として位置付けられたようである。

今年度も、美ファビ学科の学生による最後の機会として、特色ある教科内容を活かし、学生ボランティアとして参加できることがあればぜひ経験させたいと考える。

# 令和元年度 教育目標の達成状況

## － 保 育 学 科 －

「筑紫の心」をもち、豊かな人間性と保育者としての専門性を兼ね備え、社会に貢献できる実践力のある保育者を養成する。

### 1. 建学の精神「筑紫の心」を踏まえ、3つのポリシーに沿った教育の実施

- ・アドミッション・ポリシー、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーを授業のみでなくインターンシップを利用することでより学生が再確認できるように検討をした。
- ・保育学科のシラバスを見直し、それを実施した。昨年度、編成したシラバスに基づいて実践を行いながら、保育者としての資質向上を図るため、本学科教職員をはじめ非常勤講師とともに本学の建学の精神である「筑紫の心」を基盤に、学生一人ひとりに応じた指導を行った。
- ・平成30年度初めて16名の学生が「こども音楽療育士」の資格認定を受けた。令和元年「こども音楽療育士」の資格認定を目指す学生は15名である。保育実習Ⅰと「こども音楽療育士」の実習先が同一施設で行えるようにした。実習先と実習内容の打ち合わせ、記録ノートの見直し、担当教員の研修などを行い、実習先を増やした。その結果、学生が充実した内容のある実習にかわったと施設側から評価された。

### 2. 教員間による連携と共同体制の推進

- ・本学科では、学外実習が6回実施される。これまで実習担当教員と副手による実習への準備がなされてきた。新たに、担当者が変わるために仕事分担を明確にした。
- ・基本的なマナーが欠けている学生が近年増え実習先にて指摘されることが多くなっている。学生が基本的なマナーを身に付けられるよう、キャリア教育演習においてマナーに関する講義を取り入れていったが今年度もまだ指摘を受ける学生がいた。今後も、日常的に全教員が指導を行っていかなければいけない。

### 3. 主体的・対話的な深い学び（アクティブ・ラーニング）の実現のための授業改善

- ・平成30年度から、新幼稚園教育要領、新保育所保育指針、新幼保連携型認定こども園教育・保育要領に基づいた保育が実施されている。その趣旨を十分に理解し、授業の中に活かしていくようにする。また、課程認定によるシラバスの改訂により、情報教育をどの授業でも積極的に取り入れることが明記されている。その為の環境整備に取り組んだ。しかし、まだ、十分な環境が整っていない点が今後の課題である。

- ・本学科における授業研究の取組

<キャリア教育演習Ⅰ・Ⅱと保育・教職実践演習の内容の検討について>

- ・キャリア教育Ⅰ・Ⅱを連動し、1年次においては、手遊びや絵本の読み聞かせ等の保育技術を中心に、2年次では学生自身が課題を自ら見つけて、その課題を自分の力で解決するアクティブ・ラーニング形式にて授業を展開した。そして、社会貢献活動が出来るように授業内容を改善した。
- ・保育・教職実践演習は2年前期に自己評価をし、2年後期に授業展開する。他の授業科目を

通して身に付けてきた知識・技能を確認し、不足している授業内容を補完・向上させた。

教育や保育の現場で保育者としての使命感、責任感、教育的愛情などを身に付けていくことが目標であり、学生の卒業後の進路と授業がつながる内容としていった。特に学生にとってこの保育・教職実践演習は最終的なまとめの授業であり、これまでに学習してきたことを再確認する良い機会となった。

- ・1年次の1回目の保育所実習で評価の低かった学生に関して、面談を行い、次回の実習に向けての細やかな助言を加え援助した。その結果、学習の成果がでて就職に繋がった。

#### 4. 認定こども園東筑紫短期大学附属幼稚園、東筑紫学園高等学校等との連携、地域社会との交流及び社会貢献

- ・認定こども園東筑紫短期大学附属幼稚園と授業や諸行事等で密接な連携をしていった。また、学生のボランティアを利用して、様々な職場体験を実施した。
- ・東筑紫学園高等学校とは、出前講義や学校見学を通して、本学科についての理解を得るような企画をたてた。高校生に保育の楽しさや喜びを体験してもらい、保育学科に興味関心をもつことができるように努めた。その結果、東筑紫学園高校から来年度も今年度同様、多数入学者がいる。
- ・地域社会の交流及び学外活動を積極的に取り入れ、講義だけでは経験できないコミュニケーション力など実践的な学びを行った。学生は学外実習で役立ったと言っている。

#### 5. 在校生や卒業生への適切な支援の充実と休学者や退学者の削減へ向けての対策

- ・令和元年度本学の入学予定者東筑紫学園高校と、連絡を取り、高校時代の学生の心身の健康状態、友人関係などの実態を把握した上で、学生の長所を伸ばし、充実した学生生活を送ることができるように学生支援にあたった。
- ・本学科では、今年度も「心の悩み110番」手帳を見直し、学生の相談に応じやすい環境を整えた。担任を中心に学生指導課、看護師、カウンセラーと連携を取りながら、きめの細かい学生指導を行っていった。
- ・今後も就職活動支援の充実を図る。幼稚園、保育所、施設の情報を在校生へ提供し、就職活動の手がかりとした。今後も、学生部（就職指導課）等と連携し、実態把握をして取り組みを強化していく。
- ・本学科内の職務分担を見直し、教職員の協力体制を強化すると共に、クラス担任は学生指導課・教務課・会計課等と日常的に情報交換を行い、学生の成績や授業料未納者等の把握に努め、それに応じた適切な対応をとった。また、学年会議、学科会議（FD会議）で情報交換をし、学生の動向について確認し、学生の指導に生かした。
- ・実習担当者の複数配置（幼稚園、保育所、施設）により、円滑な学生支援体制をつくった。
- ・非常勤講師との連携  
非常勤講師と学科長、学年主任が、学生の出席状況、授業態度などに関して定期的に情報交換を図った。学年会議、学科会議（FD会議）で情報を共有し、問題に応じて対処法を検討し、学生指導に生かした。しかし非常勤講師とのコミュニケーション取り方に難しさを感じる学生もいる。
- ・卒業後も精神的な支えになるよう援助、指導した。一ヶ月に約10名程度の卒業生が保育内容・人間関係等の相談をしに来ている。

## 6. 学生の定員確保への取組

- ・東筑紫学園の「建学の精神」を踏まえて「保育学科の教育目標」「資格取得内容」等を教員間で再確認の上、出前授業や学校訪問の要請に対して一貫性のある説明、詳しい授業内容説明等を行った。今年度は昨年に比べ保育学科による出前授業の件数が少なかった。
- ・オープンキャンパスの取組を全教職員、学生と一丸となって行った。出身高校への写真レター「母校へのメッセージ」の有効活用も行った。

# 令和2年度 教育目標

## － 保 育 学 科 －

「筑紫の心」をもち、保育者として豊かな人間性と高い専門性を兼ね備え、社会に貢献できる実践力のある保育者を養成する。

### 1. 建学の精神『筑紫の心』を踏まえ、3つのポリシーに沿った教育の実施

- ・「アドミッション・ポリシー」、「ディプロマ・ポリシー」、「カリキュラム・ポリシー」を授業のみでなくインターンシップを利用することでより学生が再確認できるように検討する。
- ・保育学科のシラバスを見直し、保育者としての資質向上を図る。本学科教職員はじめ非常勤講師とともに本学の建学の精神である『筑紫の心』を基盤に、学生の個々の特性を認め、今まで以上に専門性豊かな保育者を目指す指導を行っていく。

### 2. 教職員間の連携による活気ある協働体制の確立

- ・教員の新規採用者については、授業研究を実施する。
- ・教員相互による授業参観や意見交換により、授業の内容や方法の見直しを図る。本学の経験の浅い教員への細やかな支援を行い、本学の教育方針に従って学生指導にあたる。
- ・学級経営や学生指導の仕方を定期的に研修する機会をもつ。
- ・授業で取り組んでいること、教育内容、提出期日等を記載した提示箇所を増やし、学生と担任がより把握できるようにする。(1号館3階310研究室横)
- ・基本的なマナーに欠けている学生が近年増えていると、実習先にて指摘されることが多くなっている。学生が基本的なマナーを身に付けられるよう、キャリア教育演習においてマナーに関する講義を取り入れていく。また、日常的に全教職員が指導を行っていく。
- ・保育学科の業務担当組織の見直しを図る。

### 3. 主体的・対話的な深い学び（アクティブ・ラーニング）の実現のための授業改善

○本学科における授業研究の取組

- ・アクティブ・ラーニングによる授業の充実を図る。  
学生が自ら課題をもち、課題を解決し、成果をまとめ表現する授業を実施する。  
「キャリア教育演習Ⅰ・Ⅱ」を連動し、保育技術を中心にキャリアアップ演習を行い、2年次では学生自身が課題を見つけて、その課題を自分の力で解決するアクティブ・ラーニング形式にて授業を展開し、社会貢献活動ができる時間をもつことができるように授業内容を改善する。2年次のキャリア教育演習はクラスを超えての学生との交流を深める。新しい環境に際して積極的に参加し、協働して取り組むことを通して、就職後のコミュニケーション能力や適応能力を高める。ホームルームにて本校の「掃除教育」を学ぶ。
- ・保育・教職実践演習は、2年次前期に他の授業科目を通して身に付けてきた知識、技能を確認、自己評価し、2年次後期に不足している授業内容を補完、向上させる授業展開をする。教育や保育の現場で保育者としての使命感、責任感、教育的愛情などを身に付けていくことが目標であり、



学生の卒業後の進路と授業が繋がる内容とする。

- ・情報教育をどの授業でも積極的に取り入れる為の環境整備に取り組んでいく。
- ・1年次、最初の保育所実習で評価の低かった学生に関して、面談を行い、次回の実習に向けての細やかな助言を加え援助する。
- ・「こども音楽療育実習」後、最終授業において、実習報告会を行う。教員も参加し、今後の訪問時の参考にする。また、1年次のキャリア教育演習にて、2年次のこども音楽療育実習の報告を行い、実習の不安解消に繋げる。

#### 4. 認定こども園東筑紫短期大学附属幼稚園、東筑紫学園高等学校等との連携、地域社会との交流及び社会貢献

- ・認定こども園東筑紫短期大学附属幼稚園と授業や諸行事等で密接な連携をしていく。
- ・保育学科で作成したインターンシップ登録証「筑紫の心」手帳を活用して地域社会との交流及び社会貢献ボランティアを実施する。
- ・東筑紫学園高等学校と、出前講義や学校見学を通して、本学科についての理解を得るような企画をたてる。高校生に保育の楽しさや喜びを体験してもらい、保育学科に興味関心をもつことができるように努める。
- ・東筑紫学園高校からの新入学生に関して、高校担任との情報交換会により、一人ひとりの学生の家庭環境、教育環境などを把握した、クラス編成を行う。
- ・地域社会の交流及び学外活動を積極的に取り入れ、講義だけでは経験できないコミュニケーション能力等実践的な学びを行う。
- ・現場の保育者のニーズに応じた教員免許状更新講習、子育て支援を開催することによって地域貢献を図る。

#### 5. 在校生や卒業生への適切な支援の充実と休学者や退学者の削減へ向けての対策

- ・本学科では、今年度も「心の悩み110番」手帳を見直し、学生の相談に応じやすい環境を整える。クラス担任は今まで以上に学生の把握や家庭との連携に努め、早期に問題解決ができるようにする。教職員の持ち味を活かした温かな信頼関係の中で学生の支援活動を行う。担任を中心に学生指導課、看護師、カウンセラーと連携を取りながら、きめの細かい学生指導を行っていく。
- ・今後も就職活動支援の充実を図る。幼稚園、保育所、施設の情報を在校生へ提供し、就職活動の手がかりとする。学生部（就職指導課）等と連携し、実態把握をして取り組みを強化していく。
- ・本学科内の職務分担を見直し、教職員の協力体制を強化すると共に、クラス担任は学生指導課、教務課、会計課等と日常的に情報交換を行い、学生の成績や授業料未納者等の把握に努め、それに応じた適切な対応をする。また、学年会議、学科会議（FD会議）における情報交換にて、学生の動向について確認し、学生の指導に生かす。
- ・新採用の実習担当者、副手が加わるため今まで以上に情報交換を行い、幼稚園、保育所、施設実習が円滑に行えるように学生支援体制をつくる。
- ・非常勤講師との連携をとる。4月に非常勤講師、および教職員の紹介写真を配布する。教職員から積極的な声掛けを行うようにする。学生の出席状況、授業態度などに関して定期的に情報交換を図る。学年会議、学科会議（FD会議）で情報を共有し、問題に応じて対処法を検討し、学生指導に生かす。

- ・卒業後も精神的な支えになるよう援助、支援していく。

## 6. 学生の定員確保への取組

- ・東筑紫学園の『建学の精神』を踏まえて「保育学科の教育目標」「資格取得内容」等を教員間で再確認の上、出前授業や学校訪問の要請に対して、一貫性のある説明や詳しい授業内容説明等を行う。
- ・オープンキャンパスは全教職員で取り組み、認定こども園東筑紫短期大学附属幼稚園との連携を推進する。その際、学生の活動を取り入れる。
- ・オープンキャンパスや高校訪問の際、出身高校への写真レター「母校へのメッセージ」を有効活用する。

# 令和元年度 教育目標の達成状況

## — 食 物 栄 養 学 科 —

令和元年度教育目標として、『「建学の精神」に基づき、豊かな人間性を育み、栄養士の専門的知識と多様な技術を習得することで、「食」をとおして人々の健康づくりに寄与し、地域社会に貢献できる栄養士を養成する。』を掲げ、目標達成への課題解決に向けて様々な取組を行ってきた。

### 1. アドミッションポリシーに沿った学生募集の組織的な取組

学生募集については今年度の重点課題として、数値目標に定員 70 名を掲げ、学科教員が同じ認識をもち、共通理解を図りながら下記(1)～(5)の取組を行った。

その結果、令和 2 年度の入学生は 74 名であり、数値目標を達成することができた。

#### (1) 学園高校食物文化科との連携強化

##### ① 高校生や保護者のニーズの把握

近年、学園高校食物文化科からの入学生が減少の傾向にあることから、学園高校との情報交換会を実施し、生徒の進路状況や保護者のニーズ等について把握を行った。その中で、近年は様々な理由で就職を希望する生徒や専門学校に流れる生徒が多い、また短大からの編入が厳しいと思っている保護者も少なくない等の情報が得られた。更に実験を通して高大の連携を図りたい等の要望を聞くことができた。これらのことを基に「高大連携授業」の取組に繋げることができた。

##### ② 高大連携授業の実施

学園高校食物文化科の 1・2 年生を対象として、生徒が本学科に興味や親しみをもち、本学科に進学したいという気持ちを高めてもらう目的で高大連携授業を行った。具体的な取組については、高校の既習内容をさらに深める内容で、それぞれの学年において前・後期 1 回ずつ行った。

授業①「亜硝酸ナトリウムによるミオグロビンの定性反応を知ろう」

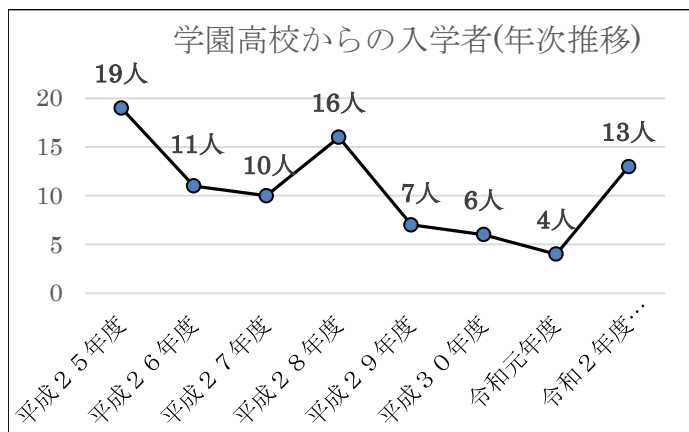
授業②「人工イクラの仕組みを知って、酵母の発酵について学ぼう」

授業③「顕微鏡を使って酵母やでんぷん等を観察しよう！」

授業④「野菜などに含まれる天然色素の特徴と食品の着色料について学ぼう」

取組後のアンケート結果では、①実験が楽しかった(100%):(とても楽しかった 85%、楽しかった 15%) ②食物栄養学科に興味を持った(100%) (とても興味を持った 40%、興味を持った 60%) と、ほとんどの生徒が実験に興味関心をもって楽しく学ぶことができ、食物栄養学科にも興味を示してくれ、有意義な取組となった。

また、学園高校との連携を強化することで、それぞれの課題や想いを共通認識することができ、近年、学園高校食物文化科からの入学生が減少の傾向にある中、入学者の増加にもつなげることができた。



## (2) 出前講義・進学ガイダンスの充実

進学ガイダンスや出前講義においては教務課と共通理解を図り、高校生にとって分かりやすい視覚に訴えるような資料を作成し、栄養士免許取得の魅力について理解を深めてもらうことができた。

## (3) 学科オープンキャンパスの充実

高校生が本学科の学修内容に関心・興味をもち理解が深まるよう、実習・実験等の体験を行い、学生目線による学科の魅力や特徴等の説明を行うなど内容の充実を図った。4回のオープンキャンパスでは、延べ人数 145 名の参加を得た。

## (4) 「北九州ゆめみらいワーク 2019」への参加による本学科への関心度の向上

今年度もこの企画に参加し、本学科の授業や実習における取組を紹介することにより、本学科への興味・関心をもってもらうことができた。2日間の開催で延べ人数 1800 名の参加があった

## 2. 教育支援の体制強化と学修の質の向上

### (1) 基礎学力の向上

1年次では「入学前課題」を実施し、短大の授業へのスムーズな移行を図るとともに、解説を行って知識の定着を図った。また学生全員を対象に栄養士の業務に必要な「栄養士のための基礎数学演習」を実施して、補講が必要な学生を対象に、リメディアル講座や個別指導を継続して行った。その結果、正解率 90%までレベルアップを図ることができた。

2年次には、廃棄率や発注量、栄養価計算等、栄養士として働く上で実践に即した内容で計算問題に取り組みさせた。その結果、ほとんどの学生の正解率を 80%まで引き上げることができた。今後も2年間を通した系統的な指導を継続して行うことにより、栄養士業務に必要な計算力の向上を図ることが必要と考える。

### (2) 再履修者及び休・退学者減少に向けた取組

欠席・遅刻が目立つ学生や課題が未提出の学生等について、学科会議等で情報を共有して共通理解を図り、困りをもつ学生の早期発見に努めた。また非常勤講師との情報交換会を令和 2 年 2 月 20 日 (木) に開催し、学生の実情に合わせた授業内容や定期試験に向けた対応等について協議し、学生支援に向けた共通理解を図ることができた。

### (3) アセスメントポリシーに基づいた学生支援

建学の精神に基づいた学生生活への取組と学生が自立した人間として成長するための総合的な力を育むことを目的に、学生の希望や生活習慣等を適切に把握した学生調査票を作成し、学生面談や学生指導の際に生かした。

また個々の学生の学修への取組状況やその評価を可視化し、栄養士免許・卒業必修科目において、それぞれの科目の到達目標や満足度、成績等をカルテ内容とした一覧票を作成し、学生が自己評価を行った。多くの学生から、不足している知識や技能、自身の取組について振り返りができたことで今後の方向性が見えた等、前向きな感想が聞かれた。

### (4) 九州栄養福祉大学3年次への編入の養成

1年次より担任や学科教員による学生の状況把握を行い、編入の心構えや意識の醸成を図った。また2年次には学生の実情に応じて編入に向けた取組を促したことで、今年度は7名の学生が九州栄養福祉大学食物栄養学科3年次に編入することができた。

## 3. 社会で活躍できる栄養士養成のための支援

社会に貢献できる栄養士としての資質や豊かな人間性向上のための教育・支援として1年・2年ともに、栄養士課程の教科時間内では取り上げることが難しい内容を盛り込んだ「キャリアアップ演習Ⅰ・Ⅱ」を卒業必修として開講した。

1年生では、基本的な生活環境を整える講座をはじめ、就職活動についての意識付けを行う講座も実施した。2年生では、学科教員による栄養士実力認定試験に向けた模擬テストとその解説を中心に取り組んだ。

受講した学生のアンケート結果では、①テーマが適切であったか(85%) ②内容が理解できたか(82%) ③社会に活用できるか(83%)であり、8割以上の学生が内容について満足している結果であった。

## 4. 職業意識の確立へ向けた就職活動の支援

保育園の就職を希望する学生が多いため、附属幼稚園での親子料理教室に学生を参加させ、幼児教育についての理解を深め就職活動に繋げた。また食物栄養学科で取得できる免許や資格を生かした職業に就いている卒業生との交流会を計画し、情報交換を通して社会における栄養士活動や社会人としての役割等を学ぶ機会を開催し、職業意識の確立に繋げた。更に就職指導課と連携を密にとり、学科教員の共通理解を図りながら就職支援にも取り組んだ。その結果、学生全員が希望する就職活動を行うことができ、令和元年度の就職率は100%であった。(栄養士(70%)、医療事務(21%)、一般企業(9%)、編入学・進学(10名))

## 令和2年度 教育目標

### — 食物栄養学科 —

#### <教育目標>

「建学の精神」に基づき、豊かな人間性を育み、栄養士に必要な専門的知識と多様な技術を習得することで、「食」をとおして人々の健康づくりに寄与し、地域社会に貢献できる栄養士を養成する。

#### 1. アドミッションポリシーに沿った学生募集の組織的な取組

学生募集については、昨年度に引き続き重点課題とし、学科教員が同じ認識を持ち、共通理解を図りながら学生募集に取り組む。下記(1)～(5)の取組等を通して、入学者数の数値目標として定員の70名を確保したいと考える。

##### (1) 学園高校食物文化科との連携による高大連携授業の実施

昨年度に引き続き、学園高校食物文化科の学級担任や進路担当教諭等と連携して、情報交換を行いながら生徒の進路の現状や保護者のニーズ等の把握に努め、学生募集の増加を図る。また昨年度から実施している食物文化科の1・2年生を対象とした高大連携授業を今年度も実施する。具体的には、生徒が本学科に興味や親しみをもち、進学したいという気持ちを高めてもらえるよう工夫を行いながら、それぞれの学年において前・後期1回ずつ実験の授業を行う。

##### (2) 各高校における出前講義・進学ガイダンスの充実

学生募集においては、出前講義や進学ガイダンスの充実が大切である。それには、各高校の実情について共通理解し、高校生にとって分かりやすい視覚に訴えるような資料を作成し、学科の特徴や栄養士免許取得の魅力について理解を深めてもらうことで学生募集につなげる。

##### (3) 学科オープンキャンパスの充実

高校生が本学科の学修内容に関心・興味をもち理解が深まるよう、実習・実験等の体験活動を工夫するとともに、学科の魅力や特徴等を中心に据えた説明を行うなど内容の充実を図る。また実験・実習サポート役の学科在学生との触れ合いを通して、本学科への興味・関心を高める。

##### (4) 男女共学に伴うカリキュラム見直しの検討

本学科は2019年度から男子学生の募集を行っており、2020年度に2名の男子学生の入学をもって男女共学となった。そこで男女ともに栄養士免許を生かした職業につなげられるような新たな資格取得やカリキュラムの見直しについて検討を進めていく。

##### (5) 「北九州ゆめみらいワーク2020」への参加による本学科への関心度の向上

この企画は、地元企業の仕事内容や様々な職業の紹介等を通して職業観を醸成し、各自に合った職業選択につながることを目的として開催されており、昨年度は延べ人数1800名の参加を得ることができた。

今年度もこの企画に参加し、本学科の授業や実習における取組を紹介することにより、本学科への興味・関心をもってもらうとともに、入学志願者数の増加に繋げる。また、日本栄養士会とも連携し、栄養士活動についての理解や周知を図り学生数の増加につなげる。

## 2. 教育支援の体制強化と学修の質の向上

近年、学修面の不安やコミュニケーション不足、さらにキャリアへの不安を抱える学生が多くみられることから、それらを解消する手立てが必要と考える。さらに休学・退学者の減少に向けても、学生の目線に立った学修内容や生活面等の指導及び充実した学生生活のための支援体制を充実する。

### (1) 基礎学力の向上

学修面の不安を軽減し、実践力のある栄養士を養成するには、栄養士として必要な基礎学力の定着が必須である。

1年次では「入学前課題」を実施し、短大の授業へのスムーズな移行を図るとともに、解説を行って知識の定着を図る。また学生全員を対象に栄養士の業務に必要な「栄養士のための基礎数学演習」を実施して、補講が必要な学生を対象に個別指導を継続して実施する。この結果を踏まえ、栄養士業務に必要な計算力の向上を図るとともに基礎学力の底上げを図る。

2年次には「栄養士のための基礎演習」として、廃棄率や発注量、栄養価の計算など、実践的な計算問題に取り組みさせる。栄養数学のテキストを使用して全員を対象に確認テストを行い、補講が必要な学生には個別指導を実施する。さらに、食品成分表を使った実践的な問題にも取り組み、到達基準に達していない学生には補講や個別指導を実施するとともに、各教科での指導も併せて行う。

これら2年間を通じた系統的な指導を継続して行うことにより、栄養士業務に必要な計算力の定着を図る。

### (2) 再履修者及び休・退学者減少に向けた取組

再履修者及び休・退学者をなくすには、担任や教科担当等による学生の状況の把握と早期の対応が求められる。

#### ① 困りをもつ学生の早期発見・早期対応

欠席・遅刻が目立つ学生や課題が未提出の学生等について、学科会議等で情報を共有して共通理解を図り、困りをもつ学生の早期発見に努める。また、担任による学生への面談や保護者との連携による早期対応に努める。さらにオフィスアワー等を活用して教科担当による学生への指導も行い、きめ細かな対応を行う。

#### ② 非常勤講師との情報交換会の開催

非常勤講師との情報交換会を年1回開催し、学生の実情に合わせた授業内容や定期試験に向けた対応等について協議し、共通理解を図りながら学生の支援に向けた組織的な対応を行う。

### (3) 分かりやすい授業の工夫

学生の興味・関心を引き出しながら分かる授業を行うには授業の工夫も大切である。授業の目的や自主学習の必要性等を明示し、授業の速度を考慮しながら分かりやすい説明を行って、学生の実情に合わせた授業展開を行う。また対話的で深い学び（アクティブラーニング）に向けた授業の取組を行う。

### (4) 特別支援教育の観点からの学生理解及び支援

近年、合理的な配慮が必要な学生が少なからず見受けられる。学生の合理的配慮の必要性の有無や生活サイクル、将来の目標等の内容を記した学科独自の学生状況調査票を作成し、保健室や学生指導課と連携して、共通理解を図りながら学生に寄り添った支援に当たる。

### (5) アセスメントポリシーに基づいた学生支援

建学の精神に基づいた学生生活への取組と目標達成のために、栄養士免許・卒業必修科目において、それぞれの科目の到達目標や満足度、成績等をカルテ内容とした一覧票にして学生が自己評価を行う。そのことにより、学生の履修の意義やモチベーションを維持するとともに、不足している知識・技能についても明確化を図る。

#### (6) 九州栄養福祉大学3年次への編入の養成

九州栄養福祉大学3年次への編入に向けて、担任による面談の際に学生の希望や状況等を把握し、1年次より編入の心構えや意識の醸成を図る。また2年次の当初より、学生の実情に応じて編入に向けた取組を促し、本学科からの編入希望者数の増加に努める。

### 3. 社会で活躍できる栄養士養成のための支援

社会に貢献できる栄養士としての資質や豊かな人間性向上のための教育・支援として1・2年ともに、栄養士課程の教科時間内では取り上げることが難しい内容を盛り込んだ「キャリアアップ演習Ⅰ・Ⅱ」を卒業必修として開講する。

1年生では、基本的な生活環境を整える「身だしなみ講座」や「性犯罪から身を守る」等の講座の他、就職活動についての意識付けを行うために「就職活動に関して卒業生からのアドバイス」等の講座も実施する。

2年生では、学科教員による栄養士実力認定試験に向けた模擬テストとその解説を中心に取り組む。また卒業後の社会人として必要な「社会人のマナー」や、栄養士業務で就職している卒業生を講師とした講座「先輩に学ぶ」等、教科の時間では取り上げることが難しい内容について、キャリアアップ演習を卒業必修科目として受講させ、学科教員が共通理解を図りながら取り組んでいく。

### 4. 建学の精神を理解した学校行事・生活指導への取組

建学の精神に基づく行事教育、生活指導教育は、キャリアアップ演習、ホームルームなどを通じて機会あるごとに理解を促す。特に生活指導に関する教育は栄養士養成の上でも重要であり、社会に奉仕できる人間力や実践力を身につけさせるには、まず教員が建学の精神を十分理解し、授業等を通して指導していくことが大切である。

### 5. 職業意識の確立へ向けた就職活動の支援

#### (1) インターンシップの取組

保育園栄養士の求人が多く、保育園の就職を希望する学生も多いため、認定こども園東筑紫短期大学附属幼稚園と連携した栄養士業務の体験の場を設定する。その中で献立作成や大量調理、調理における衛生管理等の業務を体験することで職業意識を深めさせる。

#### (2) 食物栄養学科卒業生との交流会

食物栄養学科で取得できる免許や資格を生かした職業に就いている卒業生との交流会を計画し、情報交換を通して社会における栄養士活動や社会人としての役割等を学ばせ、職業意識の確立や就職活動の一助となるよう計画する。



# 令和元年度 教育目標の達成状況

## — 専攻科 —

「建学の精神」の理念を育み、地域社会に信頼され貢献する介護福祉士の育成を目指し、専門教育ならびに社会性の修得を教育目標とする。

### 1. 専門的な知識・技術の体系的な修得

#### (1) 授業内容の充実と教員間の連携

介護福祉の専門性の習得に向けて、今年度は「授業内容の充実」「教員間の連携」「他学科との連携」に取り組んだ。科内教員間の情報共有及び連携を通して、分かりやすい授業の展開に向けて尽力した。また、食物栄養学科や美容ファッションビジネス学科との連携授業では各専門領域の講義・演習授業を通して学生の知見を深めることができた。

学生は日々、講義・演習・実習に前向きに取り組んでいるが、学んだ知識や技術が定着までには至らないこともあり、予習や復習等の日々の自己学習の必要性を痛感している。今後は、学生の学ぶ意欲を育てながら自己学習の促進に関する取り組みを進めたい。また、体系的修得の充実を目指して、授業内容のすり合わせや教材研究、享受方法の工夫にも努めていく。

#### (2) 国家試験受験対策の強化

前年度の課題を踏まえ、今年度は個別指導と主体的学習の強化、促進に重点を置いた。個々の学生の特性と傾向を10月までに見極め、成績不振の学生には個別の学習指導を開始した。学生の特性に合わせながらマンツーマンの指導を基本としたことにより、的確な理解へと運動することができた。また、学生の主体的学習の促進に向けて、①携帯電話で試験対策が可能となるアプリ〔国家試験対策アプリ〕の導入、②成績アップに向けた自己学習計画書の作成、③模擬試験成績グラフ(22回実施)を用いた個人面談の実施、④保護者への連絡等に取り組む、受験対策に対する意欲の向上を図った。

これらの対策強化の結果として、模擬試験の得点(クラス平均点)は81.7点(11月30日実施)から97.8点(1月25日実施)に上昇し、学生全員の得点向上を実現できた(試験は125点満点、合格ラインは75点前後)。併せて、個々の学生が積極的に国家試験対策に取り組む姿を見ることができた。国家試験対策は学生と教員が共に精進することが大切であると考え。次年度においても、学生の特性を理解し、個々に応じた指導と支援に努めながら100%の合格率を目指す所存である。

#### (3) 主体的学習促進に向けた環境づくり

「学ぶ楽しさ」「専門性が具わる実感(達成感)」の会得を重要視し、学外研修の拡大(今年度4回実施)と学生が発表する機会の充実を図った。

学外での学びは学生に好評であり、また、学内で学んだ学習内容の理解が深まるため非常に有意義な教育活動であった。実習報告や研究発表では、新しくプレゼンテーション発表を取り入れた。テーマや内容を自ら選定し取りまとめていく作業を通して、個々の学生が学びの専門性を深めることができたと捉えている。

加えて、今年度より、早い時期における自己学習の習慣化を目指して、福祉住環境コーディネー

ター検定試験の受験時期を後期(11月)から前期(7月)に改めた。早い段階から専門学習に取り組む環境を形成したことにより、受験勉強に対する意識を養うことができた。

## 2. 社会性の育成に向けて

### (1) 社会規範を理解し幅広い教養を養う

社会人として必要な基礎力の育成は、重要な学生支援の一つとして毎年尽力しており、今年度も授業への出席、提出物の期限厳守、マナー遵守に関してクラス担任による指導をもとに教員全体で指導を行った。多数の学生は社会性を養っていたが難しい学生も見受けられた。社会性の習得は大事な教育活動であるため、一人ひとりの学生に向き合い、個々の課題を明確にしなが、根気強く個別の指導に取り組むことが大切であると受け止めている。

### (2) 就職活動への支援

本科の学生は、保育(児童)と介護福祉分野にわたる就職先、職種が選択できるため、随時、相談に応じながら両分野の情報提供に努めている。個別支援として、クラス担任による面談やアンケート調査、履歴書作成の指導を実施。学生の意向や特性を大切に就職活動の支援に配慮しており、今年度も全学生が希望先への就職を果たし、就職率100%を実現することができた。今後とも、就職指導課、保育学科との連携を図りながら学生の就職活動の支援に万全を期していく。

## 3. 「筑紫の心」に基づいた地域社会に信頼され貢献する人材の育成

### (1) 「筑紫の心」を養う取り組み

今年度、日々の清掃に関しては区域分けによる分担制を改め、教員と学生全員が共に掃除を行った。また、各期末には教室や介護実習室の大掃除を実施した結果、清掃活動に対する意識が生じ、毎日の掃除の習慣化に至ることができた。行事については学生の参加にばらつきが見られたため、行事教育の意義を理解し一人ひとりの責務を認識できるよう、日々丁寧な指導を徹底する。

### (2) 地域社会との連携・交流

北九州市のゆめみらいワークに出展し、専攻科及び介護福祉に関する紹介を通して多くの方々との交流を図ることができた。一方で、今年度は地域社会との交流やボランティア活動の機会を持つことができなかったため、次年度は、地域における交流活動の展開を検討し取り組んでいきたい。

## 4. 学生募集に向けた対策の強化

### (1) 保育学科との連携

今年度は学生募集の対策を強化し、様々な取り組みを実践した。保育学科の1・2年生に向けたガイダンスでは、介護福祉分野の様々な情報提供に加えて専攻科生からのメッセージを発信した。その他、介護福祉業務に関するイメージの転換を重視し、専攻科卒業生の講話の機会、年間を通した案内資料の配布、交流授業、茶話会の開催にも取り組んだが、進学予定者数は数名に留まっている。

今年度、保育学科2年生に協力いただいた意識調査では、「専攻科に進学する」また「検討してみたい」と回答した学生は合わせて42名(40.8%)であり、専攻科に興味を持っている学生が少ないことがうかがえた。調査結果を受けて、今後は専攻科に関心がある学生に向けたアプローチを重点的に取り組む必要があると考えている。保育学科と協働しながら、情報交流の機会の確保や

交流のあり方について検討を重ね、進学者数の向上を目指す所存である。

## (2) 情報発信の展開

保育学科に向けた取り組みの他に、大学祭やゆめみらいワーク、オープンキャンパスを通して専攻科に関する情報発信に取り組んだ。次年度は、ホームページの情報更新も重視しながら様々な情報発信の機会を充実させていく。

# 令和2年度 教育目標

## — 専攻科 —

「建学の精神」の理念を育み、地域社会に信頼され貢献する介護福祉士の育成を目指し、専門教育ならびに社会性の修得を教育目標とする。

### 1. 専門的な知識・技術の体系的な修得

#### (1) 授業内容の充実とカリキュラム改正への取り組み

専門的知識及び技術の習得に向けて、「分かりやすい授業」、「知識と技術の定着」を目指していく。そのために、教材研究や様々な教育手法の活用に励み、学生一人ひとりの特性と学びを丁寧に見守りながら柔軟な教育活動を実践する。併せて、教員間の情報共有と授業内容のすり合わせを務め、教員協働による体系的な修得の遂行に尽力する。

また、介護福祉士養成課程は、2022年度より新カリキュラムに転換する運びである。複雑化・高度化する介護福祉ニーズに対応し、介護福祉の中核的な役割を担う人材の育成という新しい教育内容の趣旨のもとに、今年度から、新しいカリキュラムの編成等を検討し準備を進めていく。

#### (2) 主体的学習促進に向けた環境づくり

「自己学習の習慣化」「専門性が具わる実感（達成感）」を重要視する。具体的には、①学外研修等の学外での学びと多様な講話の機会、プレゼンテーション及び発表の機会の充実、②予習や復習を習慣化する取り組み、③福祉住環境コーディネーター検定試験の合格対策強化を実施する。学習の主体性向上の土台には、学び成長することが楽しいと実感できる教育環境の形成が不可欠である。分かりやすい授業展開の研鑽とともに日々の学生とのコミュニケーションも重要な教育活動の一つとして大事に取り組んでいきたい。

#### (3) 国家試験受験対策の強化

国家試験対策では、日々の教育活動の積み重ねとともに、個別指導と主体的学習の強化、促進に重点を置く。早期において学生の特性を理解し、適宜、一人ひとりに応じた学習指導を実施する。また、自己学習計画書の作成や模擬試験結果の自己分析、担任による面談を通して学習意欲の向上を図る。国家試験受験は学生にとって大きなチャレンジであり合格時に獲得する達成感は意義深い経験となる。本年度も国家試験対策に万全の体制で取り組み、合格率 100%を目指す所存である。

### 2. 社会性の育成に向けて

#### (1) 社会規範の理解と礼節の育成

社会人として必要な礼節や規律性の定着を目指す。あいさつ、授業の出席、時間・提出物の期限厳守、報告・連絡・相談、適切なコミュニケーション力が身に付くように、毎日の授業や教育活動を通して指導を徹底する。

#### (2) 就職活動の支援

本科は、保育・介護福祉両分野の就職が選択できるため、就職指導課、保育学科と連携を図りな

から両分野の情報提供に努めていきたい。学生の意向や特性を大切にしたい就職支援に尽力し、就職率100%を目指す。

### 3. 「筑紫の心」に基づいた地域社会に信頼され貢献する人材の育成

#### (1) 「筑紫の心」を養う取り組み

「筑紫の心」を理解し日々の生活に結び付けていけるように、日頃から学生に声をかけ啓発に取り組む。前に踏み出す力、学ぶ意欲、他者に対する思いやりや優しさ、コミュニケーション力を養い、筑紫の四つの心が調和し根付いていくための教育活動に尽力する。清掃活動や行事等についてはその意義を伝え、参加を通して自己の役割を理解し責任ある行動ができる学生の育成を目指す。

#### (2) 地域社会における活動

幅広く視野を広げ地域社会に貢献する意識を培うために、地域交流の機会を設けていく。ボランティア活動や多世代交流を促進し、情報提供や参加機会の調整等を実施する。

### 4. 学生募集に向けた対策の強化

#### (1) 保育学科との協働

専攻科に進学する学生が減少傾向であることから、学生募集における保育学科との協働を重要課題とする。

前年度の取り組みに加え、新たに、①保育学科教員との協力体制の構築、②学生相互の交流機会及び交流授業の実施、③アンケート調査の分析と活用に取り組み、保育学科と協働しながら進学対策の強化に臨む。特に、専攻科や介護福祉分野に関心のある保育科生については、ミニガイドダンスや交流の場を設け、専攻科の理解を深める機会を通じて進学希望者の増加につなげていきたい。

#### (2) 情報発信の展開

専攻科の特徴を広く情報発信するためにホームページの充実に努める。科の雰囲気や学生生活が伝わるような日々の新しい情報の発信に尽力する。また、オープンキャンパスやゆめみらいワーク、介護の仕事理解促進事業、出前講義の機会も重視し、専攻科の紹介や介護福祉の理解に向けた情報提供に取り組んでいく。

### 5. 3つのポリシー

専攻科の3つのポリシーに沿って教育活動と学生支援の充実、発展に努める。

#### ・アドミッションポリシー

建学の精神（勇気・親和・愛・知性が調和する人間性を養う人材教育）に賛同し、高齢者や障害のある方々を理解し、福祉を担う人材として活躍を考えている人。

#### ・カリキュラムポリシー

高齢者や障害者（児）まですべての人のケアができるような介護福祉士の養成を目指し、対人援助者としての基礎となる専門性に加え、教養や倫理的態度を養う。

#### ・ディプロマポリシー

本科所定の単位を修得し、介護福祉士の国家試験に合格する学力を身につけ、さらに介護福祉士としての知識や技術・倫理観を備え、地域社会に貢献できる人材を輩出する。

# 令和元年度 達成状況

## — 学 生 部 —

本年度の学生部における重点課題は、Ⅰ. 学生支援・教育指導体制の強化・充実、Ⅱ. 学生部の業務の改善及び情報化の推進の2つを柱とし、学生指導課及び就職指導課それぞれで具体的な活動目標を掲げ実践した。以下、本年度の業務内容計画・目標の検証及び評価と次年度に向けた課題について報告する。

### 1. 学生生活の充実・支援

#### (1) 学生生活の規範の確立

##### ① 学生及び教職員に対する行事教育・人格教育の意義や意味の共通理解

本年度も昨年度までと同様に充実した行事教育・人格教育が行えるように、学生委員会での反省事項等を確認・協議しながら業務改善に努めた。また、必要に応じて各学科との連絡・相談等を行い、行事教育の意義や意味を共有した。また、新講堂兼体育館にて実施した入学式・始業式をはじめとする各種の全学的行事については、緻密な計画を立案し、支障なく運営することができた。

##### ② 学生の休退学に関する原因の分析及び各学部・学科との連携による防止対策の推進

昨年度までと同様に、各学科のクラス担任を中心に担当学生の授業出席状況を適宜確認し、遅刻・欠席が目立つ学生に対しては、保護者を含めて連絡・面談などを実施してもらうことで、休退学に陥りそうな学生の早期把握・対応に努めた。また、現在休学中の学生への定期連絡や相談対応など、学生の復学に向けての取り組みの推進・強化を図った。今年度状況：(1月29日付、[ ]は昨年2/7付実績、GAKUENより)

休学：37[45]件 (管：5[7] 理：7[11] 作：7[14] 美：1[4] 保：11[2] 栄：6[7] 専：0[0])

退学：18[14]件 (管：6[1] 理：6[8] 作：1[2] 美：2[0] 保：2[1] 栄：1[2] 専：0[0])

#### (2) 学生相談・支援体制の確立

特別に配慮が必要な学生に対する案件は、個々に異なり、課題も多様であるので、個別に協議・対応した。具体的には学生部長、次長、看護師、カウンセラー、当該学科長及び担任等による情報共有並びに学生指導上に関する問題点や配慮すべきことなどについて慎重に協議・検討し、学生指導に役立てた。

#### (3) 学友会執行部の体制強化とキャンパス間学生交流の実現

学友会執行部の体制強化については、現部員の積極的な募集活動によって、昨年度に引き続き多くの新入生部員(大学10名、短大7名)を確保し、更なる体制強化に繋がった。現在の総部員数は、大学25名、短大22名である。特に、新設講堂兼体育館で実施された学友会関連行事(新入生歓迎行事、大学祭、学友会選挙等)の計画・運営においては、執行部員一人ひとりが自主性と責任感をもって、大いに活躍した。また、例年同様に九州地区大学体育協議会主催のリーダーズトレーニング(福岡市)や福岡県下執行部交流会(福岡大学)への参加に加え、本学独自の「リーダーズトレーニング合宿」(宗像市 グローバルアリーナ 大学20名参加)で、執行部学生としての役割・心構えなどを育んだ。その他、福岡県学生献血推進協議会での活動や福岡県警小倉北署との連携による性犯罪防止教育等も

行った。なお、本年度は福岡県学生献血推進協議会北九州地区ブロックの会長を本学学友会執行部学生が務め、「博多どんたくパレード」への参加やイベントの企画を通して、学生に対する献血の重要性等の啓発に取り組んだ。

キャンパス間の学生交流については、例年実施している「種蒔き祭」「収穫祭」といった学内農園行事での交流は実施したものの、学友会執行部を中心とした交流は実現できなかった。ただし、来年度中の実現に向け、学生有志による計画担当者を選出し、企画を立案中である。

## 2. 危機管理及び業務管理体制の構築

### (1) 危機管理体制の構築

#### □ 災害時の緊急連絡（メールやホームページを通じて）の構築

クラス担任を通じた緊急連絡体制を継続しつつ、学生支援システム「UNIPA」上の掲示及び本学ホームページを効果的かつ迅速に活用することで、全学的な周知がなされた。

### (2) 防犯体制の構築

#### □ 学生委員会および庶務課との連携による学内における盗難等の被害防止対策の強化

学生委員会にて学生の盗難被害の防止策を協議・検討し、学生自身の貴重品管理意識の徹底を図るとともに、設備面を含めた防犯体制・環境設備の強化を図った。特に本年度は、庶務課と連携し、新築された講堂兼体育館及びカフェテリア・ショップや図書館及び2号館のそれぞれの出入り口付近などに防犯カメラを設置した。

### (3) 事務処理作業の効率化

#### ① IT技術およびOA機器等の積極的な活用

学生支援システム「UNIPA」及び「GAKUEN」への対応に伴う業務の効率化及び作業量の軽減、ペーパーレス化等に向けて、業務マニュアルの見直し・改訂を行った。また、OA機器（コピー・FAX複合機）を刷新し、業務の効率化及び作業量の軽減を実現した。

#### ② 業務内容の見直し・改善

課員の更なる資質向上及び人材育成のため、学内外を問わずSD研修会等への積極的参加を促進した。また、両（北区・南区）キャンパス間における職員同士の連携体制の強化を図った。さらには、新設された授業料減免及び給付型奨学金制度に関する情報収集のための研修会への参加や他部署との連携強化に努めた。

### (4) 学生寮、カフェテリア、ショップに対する連携・強化

#### ① 学生寮における健康・衛生管理の徹底

寮監との連携を密にし、健康・衛生管理の徹底を図ることで、食中毒や感染症などの集団発生を未然に防止できた。特に、冬場のインフルエンザや感染性腸炎等の発症を未然に防ぐため、寮生に対してはインフルエンザワクチンの予防接種を推奨するとともに、手洗い・うがいの励行を周知・徹底した。

#### ② カフェテリア及びショップに対する衛生管理及び学生満足度の向上

学生部及び栄養学関連の専門教員とともに、委託業者を交えて食堂及び売店の運営に関する協議を実施した。主には、衛生管理の徹底に努めることや、学生のアンケート調査結果に基づく意見・要望等に対する検討を行い改善した。その結果、調理・配膳方法の工夫や食事提供開始時間の繰り上げ、売店（ショップ）での参考書販売など学生の満足度を向上させる取り組みを行い、一定の効果

を上げた。

### 3. 国際交流に向けての取り組み（新規）

本年度新たに、米国ベルビュー市のベルビューカレッジと協力提携し、学生の海外研修・短期留学等の受け入れ先として決まり、ベルビューカレッジより具体的なプログラムの提案も頂いた。

### 4. 就職支援プログラムの改善と就職実績のさらなる向上

#### (1) 公務員講座と就職対策特別講座の連携・充実

公務員合格者 大学：3名（昨年6名） 短大〔保育〕3名（昨年2名）

公務員合格者減少の要因として、講座の受講者が減少し、受験者も減少したものと思われる冬休みや実習が始まると同時に講義に参加する学生が減少してきた。

序盤は30名申込みの内20名近くの学生が参加していたが、1月過ぎた中盤以降、急に7～8名の参加となっていた。受講時間がどうしても5限目になるので、バイトの都合で参加できないとか、講義の中盤頃から実習・補講もあり参加できなくなったなどの声があり、自身が十分に受講できなかった事で自信もなくなり、受験する学生が減少した為、合格者の減少にも繋がった。次年度は受験者を増やす取組を考える。

《受講者30名⇒受験者5名⇒合格者3名＝対受講者比率：10%》

九栄大では、3年前期に2回（リクナビ）、3年後期に2回（マイナビ）の就職ガイダンスが実施された。また2年生で初めてマイナビによる「仕事研究講座」が実施された。昨年に比べて全員参加できたことは良かったが、コマ数が少なくワークの時間があまり取れなかったことから、可能であれば前期後期で各3コマは頂けると良いと考える。また、今後は講義内で記入したワークシート等について、実際の就職活動時の効果的な活用が求められる。

短大では、食栄、美ファビで「履歴書の書き方講座→課題として実際に履歴書を書き→添削して返却するとともに講義」という流れで2回連続のガイダンスを就職指導課（矢野・桑野）で行い、実際の履歴書提出において活用することができた。また外部講師によるコミュニケーション講座を行い、面接時に活かせる内容で良かった。

#### (2) 各学部・学科との連携

九栄大、短大と連携し本学初となる業界・業種研究会を開催することができたことで、学生も「色々な職種の方と話すことができ良かった」などの声もあり喜んでもらった。ただ、情報連絡不足により、年度のキャリアスケジュール等で、就職指導課が把握していない場面もあり、次年度は更なる連携強化が必要と感じた。

#### (3) 地元の法人との関係強化と更なる開拓

企業、施設、幼稚園・保育園、官公庁や大学等教育機関含め全約600名と名刺交換ができた。また、名刺交換した企業様に声をかけ、21社（14業種）参加の学内業界・業種研究会を本学で開催することができた。企業様からは「学生さんが真面目にしっかりと話しを聞いてくれた」「良い雰囲気の中で説明できた、次回も是非呼んで頂きたい」等の声を頂き地元企業との関係強化に繋がったと思われる。

#### (4) 学生支援システムの効果的活用

就職支援プロダクトの導入により、求人票登録の入力時間が軽減され事務面の改善が図れた。UNIPAでの求人の見方が浸透していなくて、周知の時期や方法など見直す余地があると感じた。SNSでの情



報発信については、Twitter で発信できる内容に更に工夫が必要であると感じており、学生へのアンケートを基により良い発信方法を検討していきたい。

(5) 総括

新体制となり臨んだ令和元年度の取組であったが、1年間を通しての取組、スケジュール等の把握不足もあり満足が行く結果とはならなかった。次年度については、課全員で『学生ファースト』を目標に前向きに取組みたいと考える。

# 令和2年度 年度目標

## — 学 生 部 —

### 1. 学生生活の充実・支援

#### (1) 学生生活の規範の確立

##### ① 学生及び教職員に対する行事教育・人格教育の意義や意味の共通理解

学生委員会を通じて、各学科との連携を図りながら、行事教育の意義や意味を共有する。

##### ② 学生の休退学に関する原因の分析及び各学部・学科との連携による防止対策の推進

各学科のクラス担任との連携を図り、休退学に陥りそうな学生の早期把握・対応に努める。

#### (2) 学生相談・支援体制の確立

保健室及びカウンセリングルームによる学生支援体制を継続するとともに、厚生委員会を通じて各学科との連携を図る。また、「特別配慮申請」の手続きを組織的かつ簡便にできるように申請するための手続き手順や指定様式を協議・検討し、学生支援に役立てたい。

#### (3) 学友会執行部の体制強化とキャンパス間学生交流の実現

積極的な執行部員の募集活動を継続し、盤石な体制を維持していく。また、各種のリーダーズトレーニングへの積極的な参加を促進し、執行部学生としての役割・心構えなどの涵養に努める。学友会執行部及び学生有志一同が手掛ける両キャンパスの学生交流の企画について、各部署と連携し、実現に向けて取り組む。

### 2. 業務管理体制の構築

#### (1) 業務内容の見直し・改善

課員の更なる資質向上及び人材育成及び業務の効率化に向けて取り組む。また、新設された授業料減免及び給付型奨学金制度内容に関する理解と他部署との連携強化に努める。

#### (2) 学生寮、カフェテリア、ショップに対する連携・強化

##### ① 学生寮における健康・衛生管理の徹底

寮監との連携を密にし、健康・衛生管理の徹底を図り、食中毒や感染症などの集団発生を未然に防止する。

##### ② カフェテリア及びショップに対する衛生管理及び学生満足度の向上

学生部及び栄養学関連の専門教員とともに、委託業者を交えて食堂及び売店の運営に関する協議を定期的実施する。主には、衛生管理の徹底や、学生の満足度調査結果に基づく意見・要望等に対する検討を行う。

### 3. 国際交流に向けての取り組み（新規）

学生の国際感覚や意識を高めながら、加速度的に国際化していく日本社会で通用する人材育成に尽力したい。具体的には、教務課及び「国際理解」の科目担当教員との協議を重ね、各学科の特性や学生のニーズに応じた国際交流プログラムを提案していきたい。

#### 4. 就職指導課

##### (1) 公務員 WEB 講座の充実

「実習や補講で受講できない」との声があり、本年度から新たに WEB で受講できる公務員講座とした。WEB 講義の後に確認試験・要点まとめ等のスクーリング講義を行い、また個別にも受講状況把握できフォローもできることから、受験者数を増やし公務員合格者の増加に向け取組たい。

##### (2) 各学部・学科との連携と学内説明会の充実

学内説明会を最低 2 回は開催できるよう、各学部・学科と密に連携をとる。また、学生が満足する学内説明会になるよう前回のアンケートを参考に改善を行う。

##### (3) 地元法人（企業）との関係強化と地元就職率の増加

商工会議所や北九州市の情報（企業情報ネットワーク等）を活用し、本学の特性を活かすことのできる企業へ挨拶・求人依頼等を行い、地元学生が地元で就職（地産地消）できるようする。また、北九州市との取組で、産学連携した地元就職率の増加にも貢献できるよう務める。

##### (4) 業務内容の見直し・改善

新体制となり約 1 年が経過し改めて各自の業務について見直す必要があると感じている。課内での役割や、今行っている業務について改善する事はないのか全員で協議し進めて行く。

# 令和元年度 達成状況

## — 教 務 部 —

### 1. 入試制度の見直しについて

本年度は大学・短大ともに入試制度の見直しを行い、受験生側からみると入試回数が増え、本学を受験する機会が多くなった。AO入試、後期推薦入試などの導入により、大学・短大の各学部・学科ともに定員確保に近づけることができ、入試の見直しは概ね成功したと考えられる。特に大学食物栄養学部の受験生が増加し、広報活動に力を入れてきた成果が表れたように感じる。オープンキャンパス、入試説明会、併設高校との連携や附属幼稚園とのつながり、高校訪問、出前講義、進学ガイダンスと学長はじめ全教職員が一体となって学生募集に取り組んだ成果と考えられる。また、入試における出願受付については、ネット出願システムを導入し、システムや書類作成等確認作業なども行い、無事に入試開始とともにネット出願をスタートすることができた。引き続き次年度入試に向けて準備や確認作業を重ね、ネット出願を充実しさらに業務の効率化を図りたい。

### 2. 学生募集について

入試制度と並行して学生確保に向けた学生募集の方法について見直しを進めた。大学案内パンフレット、オープンキャンパス、高校訪問やガイダンス等の募集活動に加え、ホームページの充実、併設校との連携強化に取り組み、費用対効果も踏まえた学生募集・広報活動に取り組んだ。

「併設校との連携強化」について、「高大連携プログラム」などの策定や、今後、併設校以外の高校との「高大連携協定」等も進める必要がある。

また、学生募集新システム（アクセスオンラインシステム）の導入を行った。資料請求者（高校生等）と高校または出願状況のデータベースの一元化により業務の効率をはかるとともにデータ分析を行い、今後、資料請求者から進学ガイダンス・オープンキャンパス等の参加、出願に結び付けていくことが期待できると思われる。

### 3. 教務業務の見直しについて

学生満足度調査からの指摘を受け、教務課窓口の明瞭な案内やサービス向上を目指し、窓口業務内容案内を掲示し、遠慮なく声をかけてもらうように案内カードを設置した。窓口での対応も社会人の見本となる態度で行うことも各人が気を付けている。業務については、マニュアルを作成し職員同士が業務を互いに把握するとともに補完業務が行える体制を整えた。今後も引き続き円滑な業務遂行と業務の効率化を図っていきたい。

教務関係のシステムにおいては2017年度よりUNIPAを導入し、今年で3年目を迎えた。掲示物においても、紙媒体による掲示も少しずつ減ってきており、ペーパーレス化が進んでいる。今年、学内のWi-Fi環境の整備がすすめられたため、学生のUNIPA利用の機会が多くなったように感じる。

また、シラバスの様式（記載項目）の見直しについて、「私立大学等改革総合支援事業」に係る個々の授業回における準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間の明記が求められ、次年度に向けて様式の変更を行った。

申請関係では、リハビリテーション学部において2020年度理学療法士作業療法士学校養成施設指

定規則の一部改正に対応したカリキュラム編成が構築された。文部科学省への教育課程の変更承認申請は滞りなく行われ、2020年度のカリキュラム実施に向けた体制を整えることができた。

#### 4. 地域貢献の取り組みについて

北九州市内に在住している55歳以上の方々を対象に本年度も周望学舎と共催し「シニアカレッジ」を開講した。今年度は約30名の参加があった。また、幼稚園教諭として活躍している卒業生の支援として毎年取り組んでいる免許更新講習を、担当の先生方にご協力いただき必修領域及び選択領域ともに本年度も無事に実施することができた。来年度も引き続き本学における教育研究が地域貢献に繋がるよう取り組んでいきたい。

# 令和2年度 年度目標

## — 教 務 部 —

### 1. 学生募集について

本年度の入試結果を真摯に踏まえ、入学定員の確保に向けてさらに入試内容の見直しを行っていく。また、入試と並行して学生確保に向けた学生募集の方法についても見直しを行う。特に費用対効果を踏まえた、学生募集に取り組んでいく。

### 2. 教務業務の見直しについて

教務業務の質の向上に努める。教育過程における学生支援と教育の成果に向けて業務内容の精査と充実をはかる。また、昨年度の反省を踏まえた業務改善と教育体制の支援及び情報の共有化に向けて業務の効率の向上に努める。

南区キャンパスにおいては学習環境の充実に向けて無線 LAN や WiFi 環境の整備等、検討を進めて行く。

### 3. 認証評価に向けた取り組みについて

2年後に短大、3年後に大学と受審予定の認証評価に向けて、教務が関わる情報の精査に取り組む。建学の精神や教育理念、3つのポリシー等と学修の成果の可視化を考える。

### 4. 地域貢献の取り組みについて

本学の建学の精神に基づいた地域貢献の取り組みの一つとして、生活者実学の研究成果を地域の方々に還元し、生涯学習に関与するため、シニアカレッジや市民カレッジ等の公開講座の実施に向けて取り組んでいく。

また、幼稚園教諭として活躍している卒業生の支援として、免許状更新講習を本年度も実施し、本学の教育にご理解をいただいでいく。

## 令和元年度 年度目標の達成状況

### － 事 務 部 －

#### 1. 図書館の耐震補強工事を完了すること

学生の安全面を十分考慮したこと及び、皆様のご協力により事故等も無く工期内に完了することができました。

#### 2. 業務改善の実施

ネットバンキング利用による総合振込・給与振込や校納金収納事務の次年度実施に向け、金融機関や会計システム会社との打合せ等を行った。

## 令和2年度 年度目標

### － 事務部 －

1. 前年度に引き続き下記の教育環境整備を行いますので、経費節約のご協力をお願いいたします。
  - (1) 学友会館耐震改修工事（夏季休暇期間中より実施予定）。
  - (2) 3号館・図書館2Fのトイレ改修工事。
  - (3) 照明器具取替（LED化を順次進める）。
  
2. 業務改善（非効率業務の洗い出し）を実施します。
  - (1) 券売機を学生ホールに2台設置（各種証明書発行代金収納手続きの改善）  
現 状：教務課・学生指導課必要証明書等の確認⇒会計課で発行代金支払い⇒  
教務課・学生指導課にて発行⇒受取り  
設置後：券売機近辺に設置した電話にて教務課・学生指導課へ必要証明書等を確認⇒  
券売機で購入⇒教務課・学生指導課にて発行⇒受取り  
会計課は、1週間に1回OR2回現金及び明細を回収し収納手続きを行う。
  - (2) 文科省からの通達文書等の電子回覧（スキャンし速やかに掲示板に掲載、該当者へメールにて配信）やデータ保存を実施する。
  
3. 業務マニュアルの作成・充実を図る。  
前年度に引続き、各自の業務の再確認を含め全員でマニュアル作成を推進する。
  
4. ネットバンキングの利用促進  
ネットバンキング利用により、校納金収納事務、総合振込・給与振込等の業務の効率アップを図る。
  
5. 南区を含めた事務部内の研修会や課内のジョブローテーションの実施  
学生支援の迅速な対応ができる体制を構築する。